

2

COMMUNITY

まちづくりの息吹

地域内外の
人のつながりで
新たなコミュニティを

被災地の復興に見る新たなまちづくり

東日本大震災の被害を受けた街々は、復興のただ中にある。被災地の人たちがいま目指すのは、ふるさとを取り戻し、未来に向けた希望の芽を埋め込む取り組みだ。被災地のなかには、かねて人口減少や高齢化に直面している地域も多い。元のように戻すだけでは、衰退の一途をたどってしまう。

復興の現場では新しいまちづくりへの思いをかたちにしようと、新しい息吹が生まれている。被災地の復興にかける取り組みを見ると、大きく4つのポイントが挙げられる。

1つ目は、「地域資源」を活用すること。実は、課題を抱える地方も見方を変えれば、大きなポテンシャルを秘めている。地元オリジナルの資源やそこに根づく産業を活用することが重要だ。もちろん地元の人材も貴重な資源である。2つ目に、地域資源を生かすための「つながり」である。拠点(場)があれば、そこに人や資源が集まり、ビジョンや情報を共有したり、

新たな発想やネットワークが生まれたりするチャンスとなる。3つ目は、「つながり」のなかで生まれるアイデアや取り組みを推進するための「しくみ」である。活動を始めるだけでなく、それを継続させることが重要だ。それは、人を引きつける楽しさや面白さといった「FUN」の仕掛けやビジネスとして成り立つしくみである。

そして4つ目が「外部の視点」である。地域内では当たり前のことでも、外部の人には珍しく、魅力的なものだったりする。外部による刺激が、地元の人に新たな気づきを与え、まちづくりをいっそう後押しする。

今回取材した3件も、これらの要素を組み合わせ、新たなまちづくりを進めている。なかでも、石巻の「ISHINOMAKI 2.0」は「FUN」のしくみ、いわきの「夜明け市場」は「場」の創出、そして気仙沼の「復興元気野菜!」(エコ食品健国会)は「ビジネス」につなげるしくみを工夫している。これらを次のページから詳しく紹介する。

#01 新たなまちづくりのポイント

外部の視点・人材を取り入れ、地域内外の人のつながりと地元の資源を生かす

